主日礼拝説教「あなたのためなら惜しまない」

日本基督教団石神井教会　2018年9月9日

【旧約聖書日課】申命記　15章1～11節

1七年目ごとに負債を免除しなさい。2負債免除のしかたは次のとおりである。だれでも
隣人に貸した者は皆、負債を免除しなければならない。同胞である隣人から取り立ててはならない。主が負債の免除の布告をされたからである。3外国人からは取り立ててもよいが、同胞である場合は負債を免除しなければならない。

4あなたの神、主は、あなたに嗣業として与える土地において、必ずあなたを祝福されるから、貧しい者はいなくなるが、5そのために、あなたはあなたの神、主の御声に必ず聞き従い、今日あなたに命じるこの戒めをすべて忠実に守りなさい。6あなたに告げたとおり、あなたの神、主はあなたを祝福されるから、多くの国民に貸すようになるが、借りることはないであろう。多くの国民を支配するようになるが、支配されることはないであろう。

7あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、8彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。9「七年目の負債免除の年が近づいた」と、よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。10彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。11この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二　9章6～15節

6つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。7各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。8神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることがおできになります。
9「彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く」
と書いてあるとおりです。10種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。11あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します。12なぜなら、この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです。13この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます。14更に、彼らはあなたがたに与えられた神のこの上なくすばらしい恵みを見て、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのです。15言葉では言い尽くせない贈り物について神に感謝します。

【福音書日課】マルコによる福音書　14章1～9節

1さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計
略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。2彼らは、「民衆が騒ぎだすといけな
いから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

3イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にいて、食事の席に着いておられたと
き、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それ
を壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言
った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。5この香油は三百デナリオン以上に売
って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。6イエス
は言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良
いことをしてくれたのだ。7貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいと
きに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。8この人
はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備を
してくれた。9はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、こ
の人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

「貧しい人々はいつもあなたがたと共にいる」

この夏の三か月、大きな災害の報道に慣らされてきたわたしたちに、さらに畳みかけるようにして台風と地震の大きな被害の知らせがもたらされました。わたしたちの教会役員会では、先主日にようやく7月の「西日本豪雨災害」のための募金活動を始めることを決めたばかりなのです。既に行動を起こしてくださっている方もいらっしゃると思いますが、どういうわけか災害を逃れてきたわたしたちには、どこか危機意識が乏しいのかもしれません。

8月の特別講演で7年前の東日本大震災で被災した方々のその後に思いを寄せる機会がありました。いまだに困難の中にある方々のことを、わたしたちはいつのまにか忘れ、思い起こす機会もないままに過ごすようになっているのだと思い知らされました。実のところ、わたしたちは、何年も前のことでなく、ごく最近のことでも、自分が直接被った出来事でなければ、あまりに速やかに忘れ去ってしまう者なのではないかと思います。先週の台風、地震の報道がされる中で、「西日本豪雨災害」に被災した方が「自分たちのことも忘れないでほしい」と訴えている記事が目に留まりました。

そのような最中に、今日の主日聖書日課が与えられていることに、わたしたちは、主のご意図を思わずにはいられません。

福音書日課（マルコ 14 章）の中で、主イエスが「**貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいる**」と言われています。わたしたちは、本当にそうなっているでしょうか。わたしたちは、いつも貧しい人々、困難の中にある方々と一緒にいる、と言えるでしょうか。募金や援助の活動も、もちろん大切でしょう。しないでよい理由はありません。しかし、そのような活動も、わたしたちがその人たちと共にいる、という姿勢の表れであるからこそ、意味のあるものになるのでしょう。「共にいる」ことで、本当に必要なことが分かり合えるようになるのです。

惜しまず豊かに蒔く人は…

コリントの教会に宛てた手紙を記したパウロがここで呼びかけているのは、エルサレムの教会のための募金です。パウロが宣教活動に勤しんでいた頃、エルサレムの教会は、経済的に困窮していたのです。使徒言行録（11:27 以下）には、ローマ皇帝クラウディウスの時代に世界的な大飢饉が発生し、ユダヤ地方でも援助が必要とされ、援助物資や募金がパウロ（サウロ）らを通して届けられるようになったと伝えられています。事実、そうだったのでしょう。パウロは、この手紙（Ⅱコリント書）で 8〜9 章の二章を割いて募金の呼びかけをしていますが、「コリントの信徒への手紙一」（16 章）でも「ローマの信徒への手紙」（15 章）でも、やはりエルサレム教会への募金について触れ、教えています。

それにしても、実際に援助が求められていることに向けた募金を呼びかけるにしては、ずいぶん長々と記したものです。それは、実のところ、パウロが熱心に呼びかけるほどには、コリントの教会の人たちは募金に応じていなかった、ということなのかもしれません。パウロは、8 章から繰り返し、マケドニア（フィリピやテサロニケ）の教会がいかに熱心に募金に参加してくれているかを述べているのですが、それは、募金活動で教会間に競わせようとしてのことではなかったでしょう。実際、フィリピの教会やテサロニケの教会に宛てた手紙の中ではほとんど募金の呼びかけらしいことは語られていないのです。

コリントの教会は、パウロがほとんど単独で立ち上げた教会でした。エルサレムの教会と直接関係のある人が、コリントの教会にはほとんどいなかったのかもしれません。そうであれば、エルサレムの教会に対する関心が高まらなかったのも、仕方がないところもあります。あるいは、パウロとコリントの教会の人たちの間には、手紙のやり取りをしていた頃、ちょっとした対立が生じていました。そこで、パウロの関わる募金活動に積極的になれない感情を持っている人たちが、一定数いたことも想像されます。

しかしながら、パウロは、コリントの教会の人たちに、どうにかして募金に積極的に参加してもらいたかったのです。しても、しなくても、どちらでもよい、とは、パウロは考えませんでした。ただ、**各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりに**、主体的に募金に参加してもらうために、言葉を尽くして、その意義を教えないではいられなかったのです。

日課箇所では、パウロは、「**惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです**」と教えました。この言葉は、よく知られた格言を元にしているようです。ただ、パウロはこの言葉を、実のところ少し特別な語を用いて表現しました。直訳すると「祝福をもって蒔く人は、祝福をもって刈り入れる」となるのです。募金活動を通して与える者と受ける者とは、ただ金品をやり取りするだけではなく、「祝福」をやり取りするのだ、祝福し合う関係になるのだと、パウロは教えているのです。何となれば、そこでやり取りするものは、神から恵みとして受けたものに他ならないからです。神の恵みを分かち合う交わりの中に身を置くからこそ、互いに神からの祝福を祈り合う関係が生まれ、育つようになるのです。

神の恵みを記念して

この短い箇所の中で、パウロがどれほど「神の恵み」にわたしたちの目を向けさせようとしていることでしょうか。この中で「感謝」と訳されている言葉（エウカリスティア）も、「恵み」という意味の語（カリス）を含む表現なのです。

ここばかりではありません。パウロの手紙はどれも、「神の恵み」を明らかにするために記されたと言ってもよいのです。パウロは、どの手紙でも冒頭で、「**わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように**」（Ⅱコリ 1:2）と祝福を告げました。そして、手紙の終わりでは、「**主イエス…の恵み…が、あなたがた…と共にあるように**」（Ⅱコリ 13:13）と祝福を告げて、筆を置いたのです。

福音書日課は、主イエスが十字架につけられる数日前、弟子たちとの食事の席で一人の女に高価な香油を注がれたという有名な逸話の物語です。そのとき注がれた香油は、売れば三百デナリオン以上にもなる高価なものでした。マルコ福音書では、五千人の人々に主イエスがパンと魚を与えられた出来事の中で、その人々全員にパンを与えるためには二百デナリオンは必要だと描かれていますから（マルコ 6:37）、三百デナリオンあればどれほど多くの貧しい人を助けられたか、想像できます。彼女をとがめた者がいたのも当然でしょう、「なんて無駄なことを」と。わたしたちの間でも、同じような反応が出てくるに違いありません。たとえ信仰から出たことだとしても、不要不急に思えるもののために献げられるよりも、緊急で必要なもののために献げるべきだと考えるのです。

三百デナリオンで七千人分のパンを準備できる、と考えたであろう弟子を、しかし、主イエスはとがめられたわけではありません。ただ、彼女が「**するままにさせておきなさい**」と言われたのです。その行為が、主イエスの死を指し示すものになるからです。主イエスが十字架の死をもってお示しになられたこと。それは、無駄遣いとも思えるほどに与え尽くしてくださる神の恵みです。その恵みをお受けになられて、すべてを分かち与えくださった神の子の献身です。

主イエスが神殿の賽銭箱の前で献金する一人のやもめに目を向けられた出来事を思い起こします（12:41~44）。貧しいやもめでした。その人が、「**乏しい中から自分の持っている物をすべて…入れた**」と、主イエスは語られました。やもめの献金は、十字架で示される主イエスの献身、すべてを与えくださるという神の恵みを、指し示していたのです。同じことが、香油を注いだ女の出来事でもなされたのです。彼女は、豊かな生活をしていました。その彼女が、無駄遣いと言われるほどのものを差し出したとき、主イエスは、そこに、ご自身の進み行かれる道が指し示されていると、おっしゃられたのです。

わたしたちの献げものも、また、そのように為されるのです。わたしたちの献げものは、貧しい人々の必要のためにも献げます。それだけでなく、主が神の恵みの器としてご自身の命を惜しみなくお与えくださったことを指し示し、証しするものとして、惜しみなく献げるのです。神が、キリストによって、わたしたちを限りない恵みに満たされた器としてくださっているからです。